2023 優駿エッセイ賞
次席（GⅡ）
受賞作

厩務員になりたい

風間（かざま） 豊（ゆたか）

受賞のことば

ヒトには人相があるように、ウマには馬相があるように思います。ただし、面構えのいい馬が強いとは限らず貧相で物静かなたたずまいでも、ぶっちぎりの走りで圧倒することがあります。そのギャップがなんともたまりません。派手なレースはカッコいいですが、バックヤードにいろんな専門家がいるのも競馬です。

賞をいただきとても光栄です。賞金を一点買いに賭ける度胸はありませんが、馬の写真と文章のために使いたいと思います。

プロフィール

神戸で生まれ、小学生で東京オリンピック、中学生で大阪万博開催。高校生の時、仁川の阪神競馬場パドックで競走馬の毛並みの美しさに魅せられる。その後、競走馬にとり憑かれて写真を撮りエッセイを書き続ける。

「厩務員になりたい」

サトルが、つぶやいた。

「キュームイン？　何それ」

私と妻は、ほぼ同時に息子の顔を見た。

サトルは、妻の連れ子だ。

私たち夫婦は、バツイチ同士の結婚で、私は娘のアヤカを連れてきた。もう、アヤカは高校3年、サトルは中学3年になっていた。

生徒会長でバスケットボール県代表に選ばれる文武両道で超ポジティブ思考のアヤカと対照的に、影の薄いサトルのことで私と妻は頭が痛かった。

なぜなら、サトルがグレはじめたからだ。

担任から電話があり、持ち物検査でカバンからタバコが見つかったということだった。呼び出しをうけた私は、担任からいわれた。

「最近、年上の先輩連中とつき合いがあるみたいです」

「年上？　先輩？　サトルがですか」

「卒業生のグループで、その中のひとりの家をたまり場にしているみたいです」

初老に差し掛かった担任は、ため息をついて固まった。

「こういうのは、最初が肝心で…」

「なんとかします。私がなんとかします！」

担任の言葉を遮り、私は立ち上がり一礼した。

帰り路は忌々しい気持ちでいっぱいだった。親子といっても、サトルに対してどこか遠慮があった。私がこんな意識で接しているということは、サトルも同様かそれ以上の複雑な感情が向けられていると薄々感じていた。壊れ物に触れるみたいに接してしまうのがイヤだが距離を詰められない。

嫌われたくないからだ。

家族としてうまくやっていきたい。グレたりなんかしたら父親の無力さを露呈させるだけで世間に対して恥ずかしい。サトルのこと以上に自分のことを考える男なんだと自嘲気味に舌打ちした。

「一発かましてやろう」

結論はこれだった。この時期を逃すと、サトルから一生舐められると思った。これは教育なんだと自問自答し、最初に発する言葉を探しながら帰宅した。

いつもより遅い時間の夕食だった。部活練習から帰ってくるアヤカを待って、家族4人で食卓を囲んだ。腹を膨らませて、少しでも穏やかな気持ちで接したかったからだ。しかし、私は恐い顔をしていたと思う。

「サトル…」

私が切りだそうとしたときだった。

「今日、学校来たんだね」

サトルが、小さな声でいった。

「ああ、知っていたのか」

「ごめんなさい」

「ええ？」

いきなり謝罪され拍子抜けした。

「オレ、厩務員になりたい…」

「キュームイン？　何それ」

「競馬の馬を育てて、レースで走らせる仕事」

私と妻は声が出なかった。当然のように、高校に進学し大学に進学させたいと思っていた。

「なにそれ！　メッチャおもしろそう」

唐揚げを口に入れたままアヤカが叫んだ。好奇心が強いのはアヤカのいいところだが、マジメな話を引っ掻き回されたらたまったもんじゃない。黙れ！　ともいえずに無視した。しかし、サトルは援軍到着とばかりに言葉を走らせる。

「先輩の先輩が厩務員なんだ。ヒロさんていうから、みんなのヒーローなんだ」
「なにそれ、ダサ～！」
サトルとアヤカは、声をだして笑っている。
一発かますどころか、変な展開になってきた。
「タバコ、ごめんなさい」
箸をおいて肩をすぼめ、頭を下げた。
「タバコ吸ったの？　ダサいぜ。それよりアタマとガタイ鍛えろ、女の子にモテねえぜ、ハハハハ」
アヤカが、いいたいことを全部いってくれる。説得力がある。たいした娘だ。
そのときサトルが立ち上がった。
「高校行っている先輩がいる。中卒で働いている先輩もいる。みんな燻っている。だけど、みんななんかになりたいんだ！」
サトルの大声をはじめて聞いた。両手で何度も食卓を叩く。感極まってうっすらと涙で長いまつ毛を湿らせていた。

それから5ヶ月経って、サトルは、厩務員になるための学校に入学した。高校卒業資格も得られるという。遠くの町に旅立ち、寮生活がはじまった。
私と妻は、どれだけ思い留まらせようとしたことだろう。世間を知らない中学生だ。たまたま先輩たちのヒーローが厩務員だっただけだ。しかし、サトルは頑なだった。厩務員は、夜中から仕事を開始させ、調教した馬のウォーミングアップやクーリングダウン、エサやりや馬房の掃除もして、食事は仕事の合間にするとのこと。かなりのハードワークだ。給料はいいらしいが、そんなにつらい仕事がサトルにできるのか。すぐにイヤになって辞めてしまわないか。挫折感情を感じさせることが心配だった。

さらに、私はこんなことも考えた。二人目のお父さんとは一日も早く離れて生活したいというのが理由なのではないだろうか。そう、私には自信がなかったのだ。これから、成人になるサトルと正面切って対峙できるのか。どんなポジションをとればいいのかとても不安だった。

入学後しばらくしても、サトルからは、時々妻に連絡があるくらいで、家にはめったに帰ってこない。それでも、たまに見るたびに確実に一人前の男に近づいていた。
「やぁ」
「ああ」
前回に会ったときは、こんな感じだった。部屋から荷物をとるなりメシも食べずに帰っていった。
ところが、入学2年後の3月下旬。
私の携帯が鳴った。サトルからのはじめてのライン電話だ。出るのに戸惑う。悪い知らせか。サトルから連絡があるなんて。
「はい…」
恐々、応答する。
「ウシュバテソーロが勝った！！！」
ワケがわからなかった。画面の向こうでサトルが両手で握りこぶしを作っている。かなり興奮しているのがわかる。
「はあ？」
なんのことかわからない。
「ドバイワールドカップ、日本が勝ったよ！」
「そうか、よかったな」
よく意味がわからず、地味な返答しかできない。ともかく、ホッとした。しかし、その後に続くサトルの言葉に喉が絞られ声がでなかった。
「おとうさんのおかげだ」

おとうさん…と呼んでくれたのは、再婚間もないサトルが小学生の一時期だけだった。
「だって、あのとき、ぜんぜん怒らなかった。先生から聞いたんだ。私がなんとかするっていってくれたって。ものすごくうれしかった」
「ええっ…」
「だからボクも早くカッコいい男になりたかった。自分がホントに好きなモノってなんだろうって真剣に考えた。そしたら動物だとわかった。ボクとはじめて会った日、憶えてる？」
「…動物園か」
「そう、動物園だよ。馬のたてがみにボクが触れたの憶えてる？　そしたら、おとうさん、ボクの髪をいっぱい触ったの憶えてる？」
「サトル…」
こみあげて、これしかいえなかった。
「ウシュバテソーロ、日高産まれのきれいな馬なんだ。厩舎見学で会ったことあるから、レース見てたら興奮してしまって。こんな電話してしまったよ。ゴメンゴメン！　へへへ。オレも絶対いつか大きな仕事やるから期待しておいてね」
照れ臭そうに笑った。あのサトルが、青年の顔をしている。右手をあげて画面越しにバイバイした。

スマホをテーブルに置いた私は、ヒロさんという先輩の先輩に心から感謝した。よくぞ、息子にやりがいをくれた。息子にビビっていた肩の荷が下りた。ビビりの自分を嘲笑した。
やっと男同士の話ができそうだ。